



第3章 歴史資料と被災史料の保全・活用事業

奥村, 弘
木村, 修二
松下, 正和
森田, 竜雄
佐々木, 和子

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 7(平成20年度事業報告書):27-30

(Issue Date)

2009-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81002047>



してもらうため、特に読みやすさにこだわって作業・話し合いが進められた。

具体的には掲載する史料の決定とその史料に解説をつけるだけでなく、綱文や語句の注、史料の概要などを充実させる方針が確認され、編集作業・校正が進んだ。また、「通史編」の構想・内容についても議論が行われた。来年度は「通史編」の編纂作業が中心となる予定である。（文責・深見貴成）

第3章 歴史資料と被災史料の保全・活用事業

兵庫県公館県政資料館歴史資料部門との連携事業

兵庫県公館県政資料館（歴史資料部門）との連携事業については、副センター長の奥村が、歴史資料部運営専門委員となっているが、積極的な連携事業は行われなかった。（文責・奥村弘）

神戸を中心とする文献資料所在確認調査

本年度該事業の主な活動は以下の通りである。

1. 中央区北野地区・西脇家文書への対応

昨年度に引き続き古文書勉強会をおよそ月1回のペースで継続してきた。同会は今後も継続予定である。また、同文書所蔵者である西脇美代子さんの強い希望によりこの文書群を本学文学部へ寄贈していただく方向で話がまとまった。事務手続きを終え次第、本文書群は古文書室へ収蔵される予定である。

2. 財団法人住吉学園との連携事業

事実上昨年度より始まった同学園との連携事業は、住吉地域住民有志と当センターとの交流を通じて、『新・住吉村誌(仮)』の編さんを目指す方向で進みつつある。『住吉村誌』は戦前・戦中に編さんが進み、終戦直後の昭和21年（1946）に一部削除されながらも発刊されている。その後昭和47年（1972）には戦後の住吉村（神戸市と合併後

は住吉地区）の歴史・地誌を中心に、前次『村誌』で削除された部分を再録する形で『続住吉村誌』が発刊されているので、それ以来の住吉地域誌ということになる。住吉地区は第二次大戦時の米軍による空襲で大きな被害をうけた地域なので文献史料の残存が芳しくない土地柄だが、それでもまだまだ未調査のものも多く見込まれ、この機会にそうした文献史料が確認されることが期待される。平成21年2月28日時点で、まだ住吉学園理事会の決定がなされていないが、決定がなされ次第、住吉学園と当センターとの具体的な協議を開始することになる。出来るだけ早い決定を期待したい。

3. 兵庫区平野地区における活動

本項目は、歴史資料ネットワークへの協力の項で詳述する。

4. 淡路市育波地区公民館保管文書の調査

本件は2月中旬に所蔵者から電話による調査要請があったもので、来る3月17日に現地調査が予定されている。詳細は、来年度報告書にまちたい。（文責・木村修二）

神戸市水産会主催「いかなごくぎ煮学認定試験」への協力

神戸市水産会〔神戸市漁業協同組合、兵庫漁業協同組合、財団法人神戸みのりの公社、および神戸市〕は、神戸市の名産品であるイカナゴの釘煮をアピールするために、今年度より「いかなごくぎ煮学認定試験」を実施（試験実施日：平成21年3月15日予定）することになった。当センターは、同会からの要請に基づき、受験者配布用テキスト作成および問題作成に協力した。本件は坂江と木村が担当し、テキスト・問題作成は歴史・文化に関する部門を担当し作成は主に木村が担当した。（文責・木村修二）

羽束の回廊歴史フォーラムへの協力

『住吉大社神代記』の住吉大社解に、川辺郡為奈山の北界として「隈北公田並羽束国

堺」とみえ、「羽束国」とは川辺郡六瀬谷から有馬郡高平谷にかけての地域呼称だったと考えられている。この古代の「羽束国」の領域に関連する自治体の文化財担当職員と地区住民代表が、現在の行政の枠を超えて集い、羽束地域の南北及び東西幹線交通軸の復元を通じて歴史的な地域間交流を再発見し、当該地区の遺産を広く知ってもらうことを目的として、歴史地図作成事業を今年度よりスタートさせた。

参加者は、宝塚市萬正寺吉尾住職、三田市教育委員会生涯学習課印藤昭一氏、猪名川町ふるさと館末松早苗氏、宝塚市立中央図書館七條美樹氏、能勢町教育委員会生涯教育課重金誠氏である。地域連携センターからは、奥村と松下が参加し、コンテンツ選定やHP作成、地域住民との連携方法について情報提供を行ってきた。

今年度は、「羽束国」の領域内のスポットのうち、『摂津名所図会』に掲載されている史跡を中心に、1/2.5万の地図上に位置情報や史跡解説、写真などを載せ、HPにて公開することを目標にした。完成次第、地域連携センターのサーバーにアップする予定である。（文責・松下正和）

豊岡市における調査事業

平成19年度に、財団法人河川環境管理財団によって採択された河川整備基金助成テーマ「平成16年台風23号水害による兵庫県北部但馬地域の水損古文書の保全と活用に関する研究」は、平成20年5月をもって完了した。本研究の過程では、豊岡市但東町矢根の大石武兵衛家文書や、矢根区有文書、奥矢根区有文書などを調査することができた。また平成20年5月11日には、矢根自治会のご協力をいただき矢根公民館において「矢根地区の古文書説明会・座談会～大井堰（宣旨ヶ瀧）の歴史～」を開催することができた。参加者は矢根地区住民を中心に20名だった。同会では、松下による調査概要の報告とともに、木村が本研究の成果である出石川大井堰の歴史に関する講演を行った。会場では古文書の展示・解説をおこなうと

もに、講演終了後、座談会として地元住民の方々と大井堰のことを中心に語り合う場を設けた。なお翌日には地元在住の岩出洒一郎さんのご案内による大井堰周辺のフィールドワークも実施した。

本事業は、文書所蔵者である大石俊彦さん・玉子さんご夫妻や、日本・モンゴル民族博物館館長金津匡伸さんや同館学芸員山本龍馬さん、豊岡市教育委員会事務局の松井敬代さん、同じく石原由美子さんらの多大なご協力を得て無事完了することができた。調査成果は、簡単なレポートを作成し、同財団に提出したが、内容の一部は新年度発刊予定の年報『LINK』創刊号にも木村の文責で投稿・発表予定である。

なお、奥矢根区有文書に関しては、別途再調査を行い、奥矢根地区地元でのプレゼン活動など、地域への還元活動が実現することを期待している。（文責・木村修二）

自治体・他研究機関との連携協議、 情報交換、交流

猪名川町公民館との連携協議

本年度、8月猪名川町中央公民館からの依頼で、21年度、本センターの研究員を中心とした地域の歴史に関する生涯学習講座（生涯学習カレッジ）を行うこととなった。12月までに人選を行い、来年度5月から一年間、2週間に一度のペースで実施予定である。内容としては、猪名川町域に関する古代から近代に至る歩みについての講義と、猪名川町内の歴史遺産の見学および古文書を活用した実習を予定している。（文責・奥村弘）

淡山土地改良事務所所蔵資料の調査事業

淡河川山田川疏水（淡山疏水）は、明治19年、東播台地に農業用水を供給するために開発が決定され、同24年に最初の工事が完了した、4市1町にわたる大規模な用水路である。農水省の「疏水百選」にも選ばれるなど、産業遺産・ツーリズムの資産として注目されることから、昨年度より県教委と関係市町教委の間で「淡山疏水検討会」が組織され、文化財指定・登録を念頭に、現地踏査を始めとする詳細な調査を進めている。

淡山疏水については、淡山土地改良事務所に大量の関係資料が所蔵されており、昨年度、検討会

からセンターへ調査の協力依頼があった。これを受けて、昨年度末（2008年3月）に行われた調査にセンターから森田と文化科学研究科院生の三村昌司氏が参加し、作業の指導・サポートを行ったが、本年度も引き続き同様の協力を行った。具体的には、2008年4月3日、稲美町教育委員会によって行われた事務所金庫室保管資料の第1回調査にやはり森田と三村氏が参加し、資料の調査・整理方法についてのアドバイスをを行い、また、その後、稲美町教委の資料調査によって作成された資料カードと目録（615点）のチェック・校正作業に森田が協力した。（文責：森田竜雄）

佐賀大学地域学歴史文化センターとの交流

佐賀大学地域学歴史文化研究センターとの交流は、2007年度からである。2007年度には、佐賀から関係教員が神戸大学人文学研究科地域連携センターを訪問した。今年度は、2008年12月6日、人文学研究科地域連携センター副センター長奥村弘が佐賀大学を訪問し、「地域学シンポジウム—地域学と地域史研究」（「佐賀学」創成にむけた地域文化・歴史の総合的研究 佐賀学創成プロジェクト）で神戸大学での小野市と地域連携事業の事例を中心に報告した。

佐賀県は、肥前の国を長崎県と2つに分けて存在する。神戸大学の位置する兵庫県は、摂津・播磨・但馬・丹波・淡路の5国で県域を構成している。地域学として現県域を範囲とする「佐賀学」を提唱する佐賀大学の方法は、今後「地域学」を考察していく上で、大きなヒントになった。

【プログラム】第Ⅰ部／地域史研究の実際／地域史・説話と地域社会の形成—黒髪山為朝伝説を巡って／宮島敬一（佐賀大学教授・初代地域学歴史文化研究センター長）。

第Ⅱ部／大学と地域史研究／単位地域の調査・研究・叙述—長野県下伊那における実践から／吉田伸之（東京大学教授）地域歴史文化における大学の役割—神戸大学と小野市の連携を中心に／奥村弘（神戸大学教授）／佐賀大学地域学歴史文化研究センターの地域史研究の取り組み／青木歳幸（佐賀大学地域学歴史文化研究センター教授）・伊藤昭弘（佐賀大学地域学歴史文化研究センター准教授）／シンポジウム・テーマ：大学と地域史研究、大学に期待すること／。（文責：佐々木和子）

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターとの交流会

本事業は、本稿執筆時点（2/28）ではまだ開催されていない（平成21年3月7日開催予定）が、関大側からの要請により実現することとなった事業である。打診は20年内にあったが、直接の打ち合わせは21年に入って行われた。協議の結果、関大の同センターを会場とし、双方のセンターから概要報告を行ったあと、具体的な活動報告を行う。さらに当センターのプレゼンも兼ねて水損資料の応急措置ワークショップを行ったあと、全体的な議論を行うというスケジュールで合意した。

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターは、新しい学問体系として「文化遺産学」の構築をめざし、指定文化財だけでなく地域の歴史に根ざした文化財を「Living Heritage」として捉え、その発掘と研究および研究成果の地域への還元を実現することを目的に発足した。未指定文化財でも地域にとって重要な意味をもつものを「地域（歴史）遺産」と捉える当センターの立場とも共通するので、まことに有意義な会になるものと期待している。（文責：木村修二）

歴史資料ネットワークへの協力・支援

1. 古文書修復ワークショップへの開催協力

8/20～21の二日にわたり、神戸大学文学部古文書室にて漉き嵌め研修会を開催した（神戸大学人文学研究科地域連携センター、歴史資料ネットワーク共催）。「漉き嵌め」とは、和紙の紙漉きの原理を応用して、虫に喰われるなどして穴があいた部分に紙漉きを行わない、水に溶かした紙の繊維を流し込む（嵌める）修復方法の一つである。

今回は、日本近世史と文化財修復が専門の多仁照廣氏に講師を依頼し、2004年福井水害時の被災史料保全活動と紙資料修復の方法について講演をいただくとともに、漉き嵌めについての実演をしていただいた。

多仁氏の指導のもとに、ワークショップでは、漉き嵌め作業について、次のような一連の流れでおこなった。

■作業環境の整備～史料の現状記録～史料の解体・クリーニング・しわのぼし～フォトショップによる破損部分の面積の算出～破損部分と料紙周囲部分の紙重量の算出～補修用和紙の必要量の算出と裁断～裁断した和紙と純水のミキシング～ねり剤の作り方～すきばめ台に修復文書をセッティング、型枠の設置～和紙とねり剤の混合溶液を型枠内に投入～余分な溶液を台の下から吸引～不織布と濾紙に挟んだ状態でプレス～文書周囲部の裁断。

和やかな雰囲気の中、文書修復の実習を進めることが出来、参加者からも大変好評であった。この技術を習得するにはかなりの訓練が必要であるが、水損史料と同様に、虫食いの程度がひどい史料も復元可能であるということが一般に広まれば少しでも廃棄史料が減ると、改めて実感した。

センターは、漉き嵌めなどの資料保存に携わる者にとって必要不可欠な技術についての研修会を今後とも行い、研究員自体のスキルアップとともに、行政の文化財担当職員や地域住民へもそのノウハウを伝えていく機会を持つ予定である。（文責・松下正和）

2. 神戸市兵庫区平野地区における古文書調査とプレゼン活動

本事業は、歴史資料ネットワークの活動としてなされているが、神戸を中心とする文献資料所在確認調査を継続している当センターの活動とも深く関わっている。近世に摂津国八部郡奥平野村と呼ばれていた同地区には、数多くの古文書が確認されているが、地元で活動を進めている平野歴史クラブ（代表佃和典さん）の講演会に歴史資料ネットワークが後援し、松下、河野が関わったことが契機となって、平野地区との深い関わりが生まれた。こうした関係の直接の起爆剤となったのは、同地区で平成19年8月に発見された「合石」と呼ばれる水利遺物についての講演を木村に依頼されたことであり、講演の準備過程で同地区内外に現存する既知の文書群や未発見の文書群の調査を実施した（継続中）。具体的な調査の状況については、紙幅の都合もあり別途機会を得て報告できればと考えている。

また、前述の木村の講演は、平成20年10月26日

平野祇園神社社務所において開催された（主催：平野歴史クラブ、後援：歴史資料ネットワーク、兵庫区役所）。演題は、「「合石」をめぐる水利慣行―平野・灘目・葛城―」で、参加者は約50名だった。なお、この講演会がきっかけとなり、平野歴史クラブの主催として平成21年2月から「奥平野村古文書勉強会」が開催されることになった。月1回のペースで、平野地区の古文書をテキストに、主に木村がチューターとして参加することとなった。第1回目（2月22日）は、地区の内外から約40名の参加を得て、木村により平野地区の概要解説と古文書読解についてのガイダンスを行った。本格的には、次回（3月22日予定）からテキストの解説を行っていく予定である。（文責・木村修二）

第4章 阪神・淡路大震災資料の保存・活用に関する研究会

2009年1月16日、神戸大学附属図書館震災文庫（以下神大震災文庫）と人と防災未来センター資料室（センター資料室）の間で、所蔵資料（人と防災未来センターの方は図書資料のみ）の横断検索が可能となった。インターネットを通じて、神大震災文庫とセンター資料室の資料が手を結んだ。横断検索というのは、自宅のパソコンなどから、神大震災文庫と人とセンター資料室の資料を一括して検索することができるもので、各ホームページで両方の資料を一度に検索することが可能になった。

この横断検索システムの開発のきっかけは、昨年の「阪神・淡路大震災資料の保存・活用研究会」（以下震災資料研究会）。出席した神戸大学電子図書館係長から、附属図書館の検索システムの変更によって、外部のデータベースとの接続が容易になったとの発言があったのである。2008年に入って、図書館との懇談の中で、再度確認がおこなわれ、実施となった。その成果は、1月16日付読売新聞夕刊の一面で取り上げられた。

2009年2月19日午後2時から、第9回震災資料研究会が、人と防災未来センタープレゼンテーションルームで開催された。

テーマは、「資料の活用をめぐる一共有化と継承」。内容は、①震災経験の継承と教育一